



■主な内容

- ・第43回海外交流の会報告
 - －修道院のスケッチから
 - －食を通じてのルーマニア
 - －トイレウォッチング
- ・アイデンティティー
 - －長岡市小国町法末地区復興支援の歩み
 - －ルーマニア正教に見たルーマニア
 - －ドナウ流域考
- ・本づくりの現場から
- ・会員の本「環境建築ガイドブック」



プトナでの交流パーティー (撮影：井出)



修道院の織物の部屋にて (撮影：柳澤)

－第43回海外交流の会－

第15回ルーマニア大会からの報告

2007年2月9日14時から、女性と仕事の未来館において、吉田洋子理事の司会により、第43回海外交流の会が開催された。小川信子会長が挨拶でルーマニア正教の信仰と建築類が印象的であったなど感想を述べられ、松川淳子副会長が世界大会の開催年や国、UIFA JAPON 設立と日本大会、ルーマニア大会の参加国や参加者の数、会議での発表や展示の数と日本からの参加者について説明。スタディーツアー、交流パーティー、コンサートなど盛りだくさんの催し、事務局会議と閉会式、次回開催国を韓国が引き受けたことなどの報告を行った。ポストコングレスツアーについては、正宗量子副会長から地図を元にバスで訪れた場所と見た修道院などについて概要報告があり、この旅の参加者からの報告となった。以下にその内容を掲載する。

■ 修道院のスケッチから

報告：柳澤佐和子

動物達が自由に一人(?)で歩き回り、やるべき仕事をしているのが印象的だった。ニャムツ修道院の朝、朝早くから働く馬をスケッチしていたら、修道士がお父さんに「まだまだまだ、動いちゃダメだよ」と言ってくれて描き上げた



もの。概して、スケッチブックを持っていると皆、好意的に接してくれる。スケッチブックを抱えた旅を皆さんもどうぞ。

修道院の暮らしは、何でも自分でやるのが基本。あらゆる仕事が待っている。建物の補修、様々な食べ物の収穫、加工食品の製造等々。写真(上右)は、羊毛を色とりどりの糸に染め、織物をしている部屋で修道士から説明を受けている UIFA JAPON メンバー。織物はルーマニアの産業の一つだそうだ。

■ 食を通じてのルーマニア

報告：井出幸子

ルーマニア料理は農村博物館から始まった。スケッチもそこから。ニャムツ修道院やプトナの交流会で出された品々を含め、チョルバというスープ、サルマーレという酢漬けキャベツを使ったルーマニア風ロールキャベツやサラダ・デ・ヴィネテというナスのペーストなど。使われる素材と調理方法にローマ時代からの文化の行き交う歴史を感じた。



大きなパンの中には、豆のチョルバが

ルーマニア正教では、週2日は酪農系の食事はしないらしく、2日目の修道院の朝食は乳製品抜きの食事だった。昼食のないバス旅行で、夕方途中のドライブインでいただいたチョルバは絶品だった。

自家製ワインをはじめお酒も種類が豊富で、食前に出たツイカという蒸留酒、白ワイン、果物のリキュール、赤ワインなど。その地方ならではの銘柄もあった。リングやナッツを使ったお菓子も印象的で、ルーマニアではチーズ入り揚げパンにジャムとサワークリームをかけたパバナッシュが有名。お国柄を象徴する様々な味に出会った。

■ トイレウォッチング

報告：小林純子

世界遺産の国ルーマニアで見たトイレは、有人有料のもの以外は、我々観光客には快適とはほど遠いものだった。まとめると下記の通りである。

1. トイレの設置数が足りない。
2. 各トイレとも便器数が足りない。
3. 商業施設や駅のトイレに対するサービス意識がないようだ。そのため、国全体として、快適度のアップを感じない。
4. 市民の集まる場所には有人有料の快適なトイレが整備されている。
5. 農村部のトイレは観光地として認知が進んでいるにもかかわらず未整備状態。
6. ユニバーサルデザインの視点が不足している。
7. 観光地としての休憩、案内との総合的なトイレ整備が今からの課題。



▲都市部の整備：人の集まるところ、地下に降りたところに有人有料トイレがある

◀観光地の整備：どちらかというと、利用して欲しくないというたずまいの修道院のトイレ

(文責：須永・井出・石川)

長岡市小国町法末地区復興支援の歩み

UIFA JAPON 災害復興見守りチーム 宮本 伸子

早いもので、UIFA JAPON 災害復興見守りチームが法末で活動を始めてから、2年以上が経過し、昨年のルーマニア大会では、その様子のパネル展示と発表を行った。宮本は大会に参加できなかったが、この文章で、会員の方々と共に復興支援（我々の言うところの「見守り」）とは何なのかを、ともに考えていきたいと思う。

■ 法末の魅力=アイデンティティー

ルーマニア大会のテーマ「アイデンティティー」は、法末においては雪に凝縮されるように思う。



法末のアイデンティティー「雪と民家のたたずまい」

法末の春は雪の下で水が流れる音と共にやってきて、ふきのとう、姫たけのこ、ぜんまい等の山菜の恵みがもたらされる。

続く初夏には、田植えとともに特産品の神楽南蛮などの野菜類を植え付けると、雪解けの豊かな水が田畑を潤す。家の周囲には花や野菜の彩りと青々とした棚田が、冬の無彩色な景色と対照的な景観となる。

秋は黄金色に実ったコシヒカリを刈入れ、野菜類を菰の中に囲い入れ雪の天然冷蔵庫の出現を待つ。冬支度の合間に各家の居間から、又は屋根や峠から望む紅葉の山々は、住民自身が「値千金」と呼ぶ姿となり、雪のシーズンを迎える。

冬の雪は、屋根や車庫の人工的なとりどりの色や、住まい手を失って朽ちかけた家、手入れ不足の農地などをすっぽりと覆う。その中で雪に負けじとそびえる「くずや」と呼ばれる越後中門づくりの茅葺屋根の姿は、トタンで覆われていても、中越地震にも耐えた証として頼もしく感じる。



法末のアイデンティティー
「民家には女郎花がよく似合う」
(撮影：松川)



2007年10月21日中越地震復興祈念「みのりの茶会」
@やまびこ前(撮影者：伊達美徳)



民家調査模型「穀邸」
(制作：ものづくり大学横山研室)



2007年10月20日中越地震復興祈念「尺八と箏の演奏会」
@正平邸

■ 見守り（復興支援）チームの活動

我々の活動は、日本都市計画家協会の中越震災復興プランニングエイドと共に進めており、活動の基盤として毎週末にメンバーが活動拠点に行き住民と共に暮らすこと、そしてお茶会を定期的に関開くなど、住民と話す機会を増やすことから始めた。このお茶会は7回を数え、当初は互いに緊張した関係から、お茶とお菓子で話の弾む和やかな会となつて定着してきた。昨年秋のみのりの茶会は集落の主催で長岡の和菓子に舌鼓を打ち、今年の初釜では、別室で市長を囲んで、法末の大好きな景色の話題に盛り上がりまでとなった。

次第に信頼関係が醸成されていく中で、昨年度に集落住民と我々が策定した法末地区再生計画「住み続けられる法末を目指して」の具体化を始めた。我々は定住を目指し、①住宅のカルテ作成から住み続ける方策や空家の利活用を検討、②雪掘りの共同化をめざす「雪掘ディ」の実施、③法末の景観を維持するしくみづくりが主担当だ。

①- 1. 住宅カルテは7月にアンケート調査を行い、帰村した43戸中36戸からの回答を受け、併行していくつかの住宅の個別訪問調査に着手した。そこでは中越地震の後の修繕が十分でないままで住んでいるという事実到我々は愕然とした。旧被災者支援法の問題が、高齢化と過疎に3つ目のパンチを食わせた格好である。民家調査で得られた、がっしりした造りに守られた住まいを、より安全・安心にする知恵を検討する必要がある。

①- 2. 民家活用策も、10月の「尺八と箏の演奏会」で民家に響く和楽器の妙なる響きに皆が魅了されたし、11月末の先進事例見学会で見た民家再活用のアイデアなど考えることが盛りだくさんだ。

②. 一番の魅力でもあり、味覚などの原点でもある「雪」は、「雪掘り」と呼ぶ重労働を何とか共同化し、外部からの援助も入れて継続したいと、2月10日に初めての「雪掘ディ」を試行する。

■ 今後に向けて一輪を広げたい

法末の魅力ある景観や味覚を維持し、「住み続けられる法末」「いつまでも法末」を実現するためには、住民とその関係者と私たち支援者は常にn人(n+1)脚で走り続けることが必要であり、まだまだ目に見える成果はこれからである。

そのような苦勞しつつも、楽しい復興支援の輪をUIFAの中に広げていきたいと思う。

(特記のない写真は宮本撮影)

ルーマニア正教に見たルーマニア



語り手：彫刻家 中野 滋

カルフォルニアのカトリック教会群 (ミッショントレイル) や、サンチャゴ・デ・コンポステラへの巡礼道を歩き、四谷の聖イグナチオ教会の復活のキリスト像と聖母子像を制作された中野滋氏 (彫刻家) に、第15回UIFA ルーマニア世界大会のポストコングレスツアーに同行して見た教会建築の印象について聞きました。

Q：心に残る形は？

一つには、大きな軒の出で外壁の壁画を守る教会の形が、ことさらに印象的でした。これは深い軒を作る木構造の技術が有っての形ですね。外壁に布教の教義を壁画として描くのはここだけだと思います。同時代の西のロマネスク教会はファサードに彫像で教義を表現しており、軒の浅い (無い) 教会です。対比が面白いですね。

二つ目は、聖書で語られる方舟から、教会を船に見立てるという考え方があります。SUCEVITA や、DRAGOMIRNA の外壁や柱にみられた、太い三つのねじりひもの形は、その船の舳綱を展開した形ではないかと思っています。解説によると、三つ編みは「永遠」を意味し、青・赤・ゴールドの色は「希望・愛・祝福」ということでした。

Q：ルーマニア正教との平面の聖像—イコン—について

ルーマニア正教 (オソドックス) は、ルーマニアの人口の大半が帰依しているそうです。彫刻の聖像をお参りする西方に対し、東方正教はイコンや平面の聖像をお参ります。東方正教会は早期 (8 世紀) に治政者の聖像破壊令に甘んじた歴史があります。迅速な布教には、彫像作りの職方達を組織するより、画工を束ねる方が布教手段に相応しかったのではないかと、ビザンチンの影響が大きいと思います。フレスコ画の仕事はジョルナータ (1 日分の仕事) を一気に仕上げに行くスピードが求められますので、その結果、素朴な親しみのある風合いが感じられる壁画となったのでしょう。

Q：壁画には特徴がありますか？

ビザンチンの流れの中で、図像学的な表現にバラツキがあまり感じられず、訪れた教会壁画の表現は似通っていました。聖書の正典ではなく「ニコデモの福音書」という外典に、復活したキリストが冥府に下って義人 (アダムとイブ) を呼び戻すという「冥府下り」の逸話があります。コンスタンチノープルに有名な壁がありますが、そのモチーフが、この地の壁画に挿入されており、印象的でした。

Q：修道院の印象は？

鐘楼が無く、ミサの開始を告げるのに、木製の棒をリズムカルにタタキながら、教会を巡っていました。パイオルガンが無く、伴奏のないコラールでした。また、教会が大仰でなく、身近な教会というイメージを強く感じました。

Q：今回のルーマニアの旅の心残り？

バスでの修道院巡りが中心で、民家を訪れることが出来ませんでしたので、最終日にブカレストの農村博物館を駆け足でなめるように見回りました。とても、良かったです。次回は是非マラムレシュを訪れたいと思っています。



彫刻家ブランクーシはこんな人？
(撮影：中野)

聞き手・まとめ・広報編集部 (須永・井出・石川)

ドナウ流域考



都市環境研究所 土田 旭

■ ドナウ最下流部を見に、UIFA 世界大会に同行

これまで、ドイツ南部、シュバルツヴァルト (黒い森) からウルム、ケンプテンにかけて、あるいはバイエルン州のアウグスブルク、ミュンヘンさらにはオーストリアのザルツブルクにかけて車で訪れ、そのときどき、ドナウ川の本・支流に出会い、ザルツブルクからはリンツ、ウィーン、さらにスロバキアのブラチスラバ、ハンガリーのブダペストとドナウ川に沿って旅をした。これらの旅をひとつながりにするのに、ドナウ川という一つのコンセプトでとらえるのはなかなかうまくいったのだが、このたび UIFA 世界大会がルーマニアでもたれるので一緒に行かないかと松川から誘われ、これはドナウ最下流部を見るのによい機会と思った次第である。

■ 旅先でのドナウとの出会い

ところが少し考えが甘かった。というのは、スケジュールをあまり確かめずに、ブカレストで3、4時間ほど時間がとればタクシーでブルガリアとの国境まで往復できると踏んでいたのだが、豈はからんや全く時間がとれず、結局コンスタンツァ行き途中でドナウ川を横断したさいにバスから垣間見ただけで終わってしまった。もっとも、ドナウ河口部デルタがルーマニアにあり、しかもウクライナ国境近くであることも知らずにいたのだからいい加減なものである。しかし、ドナウ川は北に迂回しなければならなかったこと、この



鉄橋上から見たドナウ河口 (撮影：土田)

丘陵を開削して運河が造られていたこと、さらにコンスタンツァから海軍の訓練用帆船で黒海クルーズを体験できたことなどなど、それなりの収穫もあった。

■ 流域の農耕と歴史

ところで、ルーマニアのドナウ流域は、ルーマニアひいてはかつてのワラキア公国の主要部である大平原を形づくっており、しかもこの大平原が開拓され農業地域になったのは比較的近年 (といっても二、三百年) のことらしい。ハンガリーの大平原の印象が見渡すかぎり向日葵 (ひまわり) であったのにたいし、ワラキアの大平原は唐黍 (とうきび) の印象が残った。恐らくソ連邦の経済政策で各国に植民地的な単作強制された名残ではないかとも思ったが確かめていない。

歴史的関心からいうと、オスマントルコがウィーン攻略をしたルートがドナウ川に沿っていたことも実感したし、ローマ帝国の北限がアルプス山脈ではなくてドナウ川だったらしいということも今回あらためて思った。なお、ドナウ川については「ドナウ河紀行—東欧・中欧の歴史と文化—」加藤雅彦著、岩波新書で巧みに記述されている。

UIFA JAPON 事務局

〒102-0083

東京都千代田区麹町2-5-4

第2押田ビル ㈱生活構造研究所内

Phone: 03-5275-7861 Fax: 03-5275-7866

E-mail: uifa@LIQL.CO.JP

発行 2008年2月27日

THE SECRETARIAT OF UIFA JAPON

c/o LABORATORY FOR INNOVATORS
OF QUANTITY OF LIFE
DAINI-OSHIDA BLDG.
2-5-4, KOUJIMACHI, CHIYODA-KU
TOKYO, JAPAN 〒102-0083PHONE :+81-3-5275-7861
FAX :+81-3-5275-7866

本づくりの現場から

渡邊 喜代美



「同潤会大塚女子アパートメントハウス」の記録を本にする作業は、そこでの視点を女性とすまいに焦点をあててすすめている。そこに暮らした人の聞き書きからはじまる物語は、

それぞれの時代の中で、大塚女子の空間をどのように見てきたか、人と人のかかわりをどう評価してきたか、住んできたキャリアウーマンたちの自立と集住の関係は大変興味深いものがある。さらに、その同潤会同時代の日本の女性とすまい、海外における展開、そしてその時代に大塚女子が果たした建築的役割と意味を探っていく。

また、画期的な保存活動の記録からは、公的機関の所有で一番保存が期待された大塚女子がなぜ解体されたのかを考る。最終章では、大塚女子アパートメントハウスの保存再生の活動からの経験と知見を、未来につなげるために、支援者も含む多様な論点を収録する。きっと！読んで面白く資料として保存したい、いい本ができると思っている。7人のグループ作業。編集会議は時に情報交流の場ともなって、出版社の担当から「急げ」と檄を飛ばされながらも粛々と進んでいる。お楽しみに。

(*写真は、かつて元気だったときの大塚女子の中庭。今だに瓦礫の山に覆われたままである)

会員の本

「環境建築ガイドブック」

日本建築家協会環境行動委員会編
(副委員長 寺尾信子)



美しい緑色のシンプルな装丁が、先ず印象的。掲載されている環境建築が、環境性能が高いばかりでなく美しいことを予感させる。その中味は、先ずは実際に優れた環境建築を訪れ、その空間を体験しよう、というガイドブックである。

70年代から現在に至るまで全228点の作品は、北海道から九州・沖縄まで10の地方に分けられ紹介されている。各地方の冒頭には、その地方の作品・

気候概要が置かれ、環境建築と地方のアイデンティティーの密接な関係に気付かされる。また、各作品のページでは、計画の特徴が一目で判るように環境に配慮する手法が15個のアイコンで表示されている。手法の中には「地域・社会」や「木材の優れた活用」等があり、積極的に地域社会や周辺環境に寄与する計画や地場材の活用等を評価している。日本や地域のアイデンティティーを活かすことで建築の環境負荷が下がるという視点に筆者は目から鱗が落ちる思いであった。

更に、会員の寺尾信子さんを含む編集委員が見どころを解説しており、写真や図面等と併せて見ているだけで楽しい。だが、やはり、この本を片手に実際に建築ツアーをしてみたい。

(石川和代)

■ 第16回 UIFA JAPON 総会と記念講演会のお知らせ ■

日時：6月21日(土) 13時から「2008年度 UIFA JAPON 定例総会」

14時から 記念講演会「カンボジア世界遺産から見た東京(仮)」

会場：東京大学工学部1号館15号教室

講師：鈴木博之先生

内田祥三設計の1号館(昭和初期建築)の一室をお借りして開催することになりました。樹齢400年の銀杏が迎えてくれます。東大本郷キャンパスには他にも榎文彦氏、安藤忠雄氏設計の新しい空間など見所が満載。次号 NEWSLETTER で特集します。

■ 役員報告

第8回2007年11月27日：中越沖地震の義援金3万円を柏崎市長宛に送付することに決定。第15回UIFA ルーマニア大会記録作成について広報委員会でも下案を検討する。第43回海外交流の会の日時及び会場決定、内容検討。来年度総会講師は、UIFA JAPON 2008年度テーマ「アジアの建築・街・都市」に沿った候補とする。法末に足湯が完成。法末にはプランニングエイド有志が民家を購入し、今後の災害復興見守りチームの活動拠点にもなる予定。

第9回2007年12月14日：2007年度時点の正会員91名との報告あり。柏崎市へ中越沖地震の義援金送付の結果、市長よりの礼状受領の報告。来年度予算案作成方法の説明、各委員会で作成、提出すること。2007年度一般会計中間決算の審議、了承。ルーマニア大会の事務局追加業務見積書等の審議、特別会計からの支出を了承。ルーマニア大会記録案構成について検討。災害復興見守りチームの1、2月の活動参加者募集の報告。

第43回海外交流の会内容決定。2008年度総会の記念講演講師候補を決定。

第10回2008年1月31日：第43回海外交流の会の準備状況報告と役割分担決定。今後の海外交流の会についてテーマ等の提案。ニュースレター74号について編集の進捗状況報告。次回役員会は、2月28日(木)18時より生活構造研究所にて。

■ 編集後記

春を待つ季節なのに怒り心頭に達する事件が基地の街で再度！許すまじ！！(渡邊) ミュンヘンフィルの指揮者故チェリビダッケ氏はルーマニア人。ドラキュラの子孫を思わせるその風貌で、紡ぎ出す音はまさに荘厳。歴史と民族と宗教の綾なす文化を実感できたUIFA ルーマニアの旅(中野) 伝説によると酒の神バックスの出身地はドナウ川の北側・ルーマニアだという、地勢が語る歴史が興味深い(井出) 災害復興見守りチームの「雪掘デイ」に参加。大勢で短時間やるだけの身には楽しかったです(石川) 現地を知らずともだんだんルーマニア通に。これもUIFA 編集者の役割(須永)